

# 加藤清正の実像

7年におよぶ朝鮮出兵を終え、慶長4年(1599)9月頃に肥後に帰国した清正は、来るべく天下分け目の大戦に備えるため、荒廃した肥後領内の復興と朝鮮出兵で消耗した家臣団の再編成に取り掛かります。

## 〈19〉関ヶ原前夜

肥後に帰国した清正は、まず朝鮮出兵で戦った家臣団に対する論功行賞と軍団の再編成を目的として知行廻行をおこないます。朝鮮出兵中に戦死あるいは病死した清正の家臣がかなりいたと思われ、政情不安定な中央政局を考慮すると、家臣団の立て直しが急務の課題でした。また、この時期に清正は寺社の復興にも意欲を示しており、慶長4年11月29日に阿蘇社(現在の阿蘇神社)に対して出した書状の中で、豊臣秀吉を祀る豊国社の建立と、長く衰退していた阿蘇社の復興を約束しています。衰退していたとは言え、古くからの肥後における宗教勢力を抱き込むことで、統治をスムーズに進める意図があったと思われます。豊国社は翌年に立田山の中腹に完成しますが、加藤家改易後に社殿は破却されています。

さて、慶長5年に入ると清正が出す書状の数が極端に減少し、上半期の書状は現在まで1通も確認されていません。そのため清正の動向は不明と言わざるを得ませんが、この時期の一大事業として熊本城を築城している形跡が認められます。前年の慶長4年3月に清正の重臣が出した書状の中で「御城の普請に百姓たちが動員されているらしいが、これは清正様が出された方針に背くものであり、以ての外である。以後改めるように」と家臣たちを咎めています。前回述べたように、朝鮮出兵後に清正は百姓の休養政策を打ち出しています。これに違反して百姓を酷使することは支配の根幹にも関わる非常にデリケートな問題ですが、重要なのはその百姓たちが築城に使役されている事実です。書状の中で問題となっている「御城」とは、言うまでもなく現在の熊本城のことです。熊本城の築城開始時期については、関ヶ原合戦翌年の慶長6年が通説となっていますが、実際には秀吉が死去し、朝鮮出兵が終わる慶長3年後半には築城に着手していたと考えて間違いないでしょう。そして、後の史料などと合わせて考えると、慶長5年末には大天守をはじめとする熊本城の主要な建築群が完成していたと思われます。

慶長5年6月、会津の上杉景勝に謀反の動きがあるとして、徳川家康は大軍を編成して兵を東北に進めます。いわゆる会津征

伐です。これにより中央政局が大きく旋回し、この軍事行動が関ヶ原合戦の直接的な引き金となります。前回述べた清正らによる石田三成襲撃計画によって居城・佐和山城(滋賀県彦根市)に隠居を余儀なくされていた三成は、家康不在の機に乗じて打倒・家康を掲げて挙兵します。三成挙兵の呼び掛けに応じた、毛利輝元や宇喜多秀家ら全国の諸将が上方に集結し、10万人近い西軍を形成します。肥後にいた清正のもとにも西軍参加の呼び掛けがあり、7月には西軍の総大将・毛利輝元から即時上洛と西軍への参加を求める書状がもたらされています。

しかしながら、清正は早くから家康支持の立場を鮮明にしていたので、西軍からの誘いには一切耳を傾けることなく、九州における東軍の主力として九州での軍事行動に備えます。九州では清正のほかに、豊前中津(大分県中津市)の黒田如水、豊後木付城(大分県杵築市)を守る細川家重臣の松井康之・有吉立行が東軍として行動し、西軍に比べて兵力のうえでは不利な状況でした。そのため、清正は家臣の斎藤利宗を松井・有吉のもとに派遣して、不足物資の提供や情報の共有を約束し、互いの連携を強めています。

三成挙兵の知らせを聞いた家康は、会津征伐を中断して江戸に戻ります。家康は8月末まで江戸に滞りますが、清正は家康の周囲にも自身の側近や小姓を派遣して、情報を逐一清正のもとに報告させています。清正は、7月から8月中旬頃にかけて東軍本隊との合流に意欲を見せますが、結果的には九州に留まります。家康から九州における西軍大名領への侵攻を要請されていた一方で、軽率な軍事行動を自重するように命じられていました。そのような中、8月12日付の家康からの書状で、戦後の領地加増の約束と軍事行動解禁を取り付けます。この書状が9月10日に肥後の清正のもとにもたらされ、合戦近しと判断した清正は13日に陣立(部隊編成)を整え、出陣準備に着手します。

関ヶ原で東西両軍が激突したのが9月15日。奇しくも同日、清正も肥後で軍事行動を開始させ、豊後で友軍と交戦していた松井・有吉軍の救援に向かうため熊本城を進発します。

このコーナーは、大浪和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

